

日本農業新聞
2005年(平成17年)8月18日(木)

都市エリア産学官
連携促進事業を説明

帯広畜大と
とちか財団

十勝圏振興機構(とちか財団)と帯広畜産大学は11日、帯広畜産大学地域共同研究センターで共同記者会見を開き、文部科学省の都市エリア産学

官連携促進事業で十勝エリアが採択されたことを受けて同事業の概要を説明した。

事業の中核機関は「とちか財団」とし、帯広畜産大学は公的研究機関の中心的役割を担う。民間企業も参加し商品開発を目指す体制を確立した。取り組み事業は、パレイシヨに含まれるたんばく質の「ポテトペプチ

ド」やナガイモが求められることが求められているだけに、腸内発酵など腸内環境を整える「ポテトペプチド」の健康機能性の解明によって、新産業創出の期待が高まる。

ナガイモの機能性成分の抽出と分析や物性解析が進み、工業的な抽出、加工法が確立すると、規格外ナガイモに新たな用途が生まれ、付加価値の向上につながる。

ド」やナガイモを利用した機能性食品の開発、ナチュラルチーズの高品質化と安全性確保技術の開発など4項目。

十勝の基幹作物であるパレイシヨは、でんぷんの過剰で、新たな

とちか財団の有利宣理事長は「管内の農家の生産努力が農畜産物の過剰に結びついては困る。農畜産物を使った新技術の開発、新産業の創出で過剰を解消し自主自立可能な、しっかりとした十勝経済を確立するためにも産学官の連携は欠かせない」と抱負を述べた。2007年度までに商品開発と企業化のめどをつきたい考えだ。



事業の重要性を強調する有利宣理事長 活路を見いだ